

ヨハネ19：1-42「イエスが使命を遂行される」

19:1 そこで、ピラトはイエスを捕らえて、むち打ちにした。 19:2 また、兵士たちは、いばらで冠を編んで、イエスの頭にかぶらせ、紫色の着物を着せた。 19:3 彼らは、イエスに近寄っては、「ユダヤ人の王さま。ばんざい」と言い、またイエスの顔を平手で打った。 19:4 ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということを、あなたがたに知らせるためです。」 19:5 それでイエスは、いばらの冠と紫色の着物を着けて、出て来られた。するとピラトは彼らに「さあ、この人です」と言った。 19:6 祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」 19:7 ユダヤ人たちは彼に答えた。「私たちには律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります。」 19:8 ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れた。 19:9 そして、また官邸に入って、イエスに言った。「あなたはどこの人ですか。」しかし、イエスは彼に何の答えもされなかった。 19:10 そこで、ピラトはイエスに言った。「あなたは私に話さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。」 19:11 イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」 19:12 こういうわけで、ピラトはイエスを釈放しようと努力した。しかし、ユダヤ人たちは激しく叫んで言った。「もしこの人を釈放するなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、カイザルにそむくのです。」 19:13 そこでピラトは、これらのことばを聞いたとき、イエスを外に引き出し、敷石(ヘブル語ではガバタ)と呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。 19:14 その日は過越の備え日で、時は第六時ごろであった。ピラトはユダヤ人たちに言った。「さあ、あなたがたの王です。」 19:15 彼らは激しく叫んだ。「除け。除け。十字架につけろ。」ピラトは彼らに言った。「あなたがたの王を私が十字架につけるのですか。」祭司長たちは答えた。「カイザルのほかに、私たちに王はありません。」 19:16 そこでピラトは、そのとき、イエスを、十字架につけるため彼らに引き渡した。 19:17 彼らはイエスを受け取った。そして、イエスはご自分で十字架を負って、「どくろの地」という場所(ヘブル語でゴルゴタと言われる)に出て行かれた。 19:18 彼らはそこでイエスを十字架につけた。イエスといっしょに、ほかのふたりの者をそれぞれ両側に、イエスを真ん中にしてであった。 19:19 ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」と書いてあった。 19:20 それで、大ぜいのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブル語、ラテン語、ギリシヤ語で書いてあった。 19:21 そこで、ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いてください」と言った。 19:22 ピラトは答えた。「私の書いたことは私が書いたのです。」 19:23 さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。 19:24 そこで彼らは互いに言った。「それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」それは、「彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた」という聖書が成就するためであった。 19:25 兵士たちはこのようなことをしたが、イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロパの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた。 19:26 イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。 19:27 それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。 19:28 この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた。 19:29 そこには酸いぶどう酒のいっぱい入った入れ物が置いてあった。そこで彼らは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソブの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。 19:30 イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。 19:31 その日は備え日であったため、ユダヤ人たちは安息日に(その安息日は大いなる日であったので)、死体を十字架の上に残しておかないように、すねを折ってそれを取りのける処置をピラトに願った。 19:32 それで、兵士たちが来て、イエスといっしょに十字架につけられた第一の者と、もうひとりの者とのすねを折った。

19:33 しかし、イエスのところに来ると、イエスがすでに死んでおられるのを認めたので、そのすねを折らなかった。 19:34 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。 19:35 それを目撃した者があかしをしているのである。そのあかしは真実である。その人が、あなたがたにも信じさせるために、真実を話すということをよく知っているのである。 19:36 この事が起こったのは、「彼の骨は一つも砕かれない」という聖書のことばが成就するためであった。 19:37 また聖書の別のところには、「彼らは自分たちが突き刺した方を見る」と言われているからである。 19:38 そのあとで、イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った。それで、ピラトは許可を与えた。そこで彼は来て、イエスのからだを取り降ろした。 19:39 前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た。 19:40 そこで、彼らはイエスのからだを取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従って、それを香料といっしょに亜麻布で巻いた。 19:41 イエスが十字架につけられた場所に園があって、そこには、まだだれも葬られたことのない新しい墓があった。 19:42 その日がユダヤ人の備え日であったため、墓が近かったので、彼らはイエスをそこに納めた。

導入

先週は、ヨハネ18章をともに学びました。その中で、ピラトはイエスをユダヤ人の王であり無実であると宣言しました。それでもなお、ユダヤ人指導者たちはイエスの十字架刑を望みました。過越しの期間に罪人を釈放するというユダヤ人の習慣があるので、ピラトはイエスを釈放することを申し出ますが、群衆はイエスを十字架刑に処し、代わりに犯罪者のバラバを釈放することを求めました。

こうしたユダヤ人指導者たちの行動は、彼らの動機を明らかにします。彼らをはじめとする群衆は、「真理」を求めてはいませんでした。イエスが王である霊の王国に入る気はありませんでした。人々は、イエスによる天の支配を拒んだのです。

では、19章の学びに入りたいと思います。今日は、16-42節を中心に学んでいきます。

イエスの十字架の話を読み進める上で、この話がヨハネの神学的理念に沿って語られていることを踏まえておくことが大切です。ヨハネの福音書は、おもに3つのテーマに焦点を当てて、イエスの生涯を描きます。この十字架の話にも、それらのテーマが織り込まれています。

ヨハネが意識した3つのテーマは：

1. イエスの死を含むすべての出来事におけるイエスの絶対的主権と支配。

ヨハネ10：17-18

10:17 わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してください。 10:18 だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」

2. 聖書全体が示す神による人類の救いという永遠の計画の成就のために、イエスがこの世に来られたこと。

ヨハネ5：39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。

ヨハネ5:46 もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。

3. イエスが、この世の罪を取り除く身代わりの過越しの子羊として死なれたこと。

ヨハネ 1:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

ヨハネ 11 : 49-52 11:49 しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然何もわかっていない。 11:50 ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」 11:51 ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、 11:52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。

ヨハネがイエスの死について記した内容の根拠はヨハネの神学的理念にあります。先週もお伝えしたとおり、ヨハネがこの福音書を記したのは、読者がイエスを信じて、イエスの名によって「新しいいのち」を得るためです。

ヨハネは、イエスの死をその目で見た証人です。しかし、この福音書にはテーマに関連することのみが記されています。

では、16-42節を3つに分けて学んでいきましょう。

1. 神の王が十字架にかけられた。(16-22節)

18章では、イエスの「王位」が大きなテーマでした。

イエスは殴られ、くぎのついた鞭でたたかれました。この世の王とは思えない姿でしたが、ヨハネは、イエスが確かに霊の王であることを思い起こさせてくれます。

十字架にかけられた罪状書きは、3ヶ国語で記されていました。ですから、誰でもそこを通りかかれば、イエスがユダヤ人の王であったことを知ることができました。

エルサレムの町に出入りする諸外国の人々がたくさん通る場所で、イエスは十字架にかけられました。

この罪状書きは、ヘブル語、ギリシャ語、ラテン語で記されていました。

ヘブル語は宗教の言語、ギリシャ語は哲学の言語、ラテン語は法律の言語でした。

ピラトは自分でも知らないうちに、「福音のトラクト」第一号を全世界に向けて記していたのです。イエスのとなりで十字架に架けられた強盗は、その「トラクト」を読んで、イエスの王国に入らせてほしいと頼みました。

ルカ 23 : 40-43

23:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。 23:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」 23:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」 23:43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

犯罪者がイエスを信じた出来事にヨハネは触れていませんが、この事実は注目に値すると思います。

祭司長たちは、罪状書きを書きなおすようピラトに求めましたが、ピラトは、イエスがユダヤ人の王であることを認めるという自身の判断を貫きました。

悪魔はさまざまな横やりを入れようとしたましたが、神の主権の勝利でした。

神がある出来事を起こさせようと決められたら、何事もそれを止めることはできません。

これは、神の子である人にとっては大きな励みです。神のみこころに人生をゆだねるなら、私たちの人生に神がみこころとなさるご計画や目的を邪魔できるものは何ひとつありません。

神はあらゆるチャンスの扉を開いてくださいます。人にその扉を閉じたり変えたりすることはできません。神は、私たちがみこころにそぐわない間違った方向に進まないよう、扉を閉じてもくださいます。

人生を神のみこころにゆだねると、平安や安心感を得、すべての必要が備えられます。

イエスに対する神のみこころは容易いものではありませんでした。私たちにとってもそれは同じです。しかし、イエスを受け入れ、愛する人には、永遠の祝福が待っています。

では次の部分、23-37節に進みましょう。

2. イエスは、旧約聖書に示された神のご計画を成就するために死なれた。(23-37節)

23-37節でまずわかることは、イエスの十字架刑の詳細は、あらかじめ神によって綿密に計画され、旧約聖書のみことばに啓示された、という事実です。イエスの死を取り巻くディテールも、神によって入念に計画・実行されました。

十字架刑の際、刑に処せられる人物の所有物を分け合うのは兵士の特権でした。この場合、4人の兵士たちはイエスの身につけているものをひとつずつ取りました。そして、縫い目のない着物を誰が取るか、くじを引きました。

ユダヤ人は5つのものを身につけていました。履物、かぶり物、帯、長服、そして上着です。ですから、5つめを誰が取るかくじを引かなければなりませんでした。

ヨハネは、この行動が旧約聖書の成就であると語ります。

では、その個所を開いてみましょう。詩篇22：18です。

詩篇 22:18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。

ダビデは、イエスが十字架にかかれる約800年前にこの詩篇を記しました。

ですから、800年後の未来に起こる出来事について知っていたはずはありません。しかし、神のご計画の成就に用いられるため、自らをささげました。

この縫い目のない着物についてもう少し掘り下げると、なぜヨハネがその細部にこだわったかわかります。

イエスの着物は、「上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった」と記されています。

これは、大祭司が着る青服の説明と合致します。

旧約聖書における大祭司の役割は、神と人との仲介者です。

祭司はラテン語で「ポンティフクス」と言います。これは、「橋を架ける人」という意味です。

祭司は、神と人との間に橋を架ける役目だったのです。

イエスは、完全な「大祭司」です。このお方をとおしてのみ、人は神のもとに行くことができます。

イエスの死をとおして、神の王国に通じる橋がかけられ、人がそこにたどり着けるようになりました。人はイエスをとおしてのみ、その橋を渡ることができます。

次に、30節に登場する言葉に注目しましょう。

それは、「完了した」です。この部分を「すべてが終った」、「成し遂げられた」と訳した聖書もあります。

すべて「テテレスタイ」というギリシャ語の動詞から訳されています。

これは敗北の叫びではなく、勝利の歓声です。

当時、著名な画家たちがこの単語を使いました。何ヶ月もかけて描いた作品が完成した際、彼らは自らの作品を眺めて「テテレスタイ」と叫んだのです。これは、絵画が完成したという単純な意味だけでなく、付け加えるべきものも取り去るべきものも何もない状態だという意味です。

つまり、完ぺきな仕上がりだということです。

イエスについても同じことが言えます。十字架上のイエスの死は、すべての点において完成しており、イエスが成し遂げられた御業に付け加えたり取り去ったりするべきものは何もありません。

イエスはついに神の永遠のご計画を成就なさいました。

ご自身のいのちをこの目的のためにおさげになったのです。

この言葉をもっともわかりやすく説明できる例えは、当時の商人でしょう。

当時の商人たちはたいてい多額の支払いを抱えていました。返済には何カ月も何年もかかります。借金を満額返済すると、商人はその請求書に「テテレスタイ」と書き込みます。これは、「完済」と同じ意味です。

私たちにも、返済できない借りがありました。それをイエスが代わりに払ってくださったのです。

イエスは実にすばらしい救い主です。

3. イエスが過越しの子羊として死なれる。(31-37節)

ヨハネが私たちに伝えようとした要点の3つめは、イエスが「過越しの子羊」として死なれたことです。

ヨハネは、十字架にかかるイエスの足を兵士たちが折ったのをそばで目撃しました。しかし、そのときにはすでにイエスが死んでおられました。イエスが死んでいることを確かめようと、兵士のひとりがイエスのわき腹をやりで突き刺しました。すると、血と水が流れ出しました。

ヨハネは36節で、これらのことが起こったのは聖書が成就するためだと記します。

聖書が成就したひとつめの個所は、「過越しの子羊」についての個所です。

福音書の随所で、イエスのご自身の死と過越しの関連性を示されます。

過越しの子羊に問われる条件のひとつに、骨が折れていないというものがあります。

では、出エジプト記12：1-13と43-51を読みましょう。

出エジプト 12：1-13

12:1 【主】は、エジプトの国でモーセとアロンに仰せられた。 12:2 「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。 12:3 イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。 12:4 もし家族が羊一頭の分より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。 12:5 あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かや

ぎのうちから取らなければならない。12:6 あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、12:7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。12:8 その夜、その肉を食べる。すなわち、それを火に焼いて、種を入れないパンと苦菜を添えて食べなければならない。12:9 それを、生のままで、または、水で煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。12:10 それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは、火で焼かなければならない。12:11 あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは【主】への過越のいけにえである。12:12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは【主】である。12:13 あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。

出エジプト 12 : 43-51

12:43 【主】はモーセとアロンに仰せられた。「過越のいけにえに関するおきては次のとおりである。外国人はだれもこれを食べてはならない。12:44 しかし、だれでも金で買われた奴隷は、あなたが割礼を施せば、これを食べることができる。12:45 居留者と雇い人は、これを食べてはならない。12:46 これは一つの家の中で食べなければならない。あなたはその肉を家の外に持ち出してはならない。またその骨を折ってはならない。12:47 イスラエルの全会衆はこれを行わなければならない。12:48 もし、あなたのごところに異国人が在留していて、【主】に過越のいけにえをささげようとするなら、彼の家の男子はみな割礼を受けなければならない。そうしてから、その者は、近づいてささげることができる。彼はこの国に生まれた者と同じになる。しかし無割礼の者は、だれもこれを食べてはならない。12:49 このおしえは、この国に生まれた者にも、あなたがたの中にいる在留異国人にも同じである。」12:50 イスラエル人はみな、そのように行った。【主】がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。12:51 ちょうどその日に、【主】はイスラエル人を、集団ごとに、エジプトの国から連れ出された。

1. 過越しの羊は、傷のない完全なものでなければならない。⇒イエスは罪がなく、完全なお方です。
2. 過越しの子羊は、雄でなければならない。⇒イエスは男性です。
3. 過越しの子羊は、長子の身代わりとして死ぬため殺された。⇒イエスは私たちの身代わりとなって死なれました。
4. 子羊の血を家の門柱とかもいにつける。⇒過越しの際、血を付けた家の中にとどまることで身の安全を確保できました。同じく、十字架上でイエスが成してくださった御業を信じることで、私たちは永遠の死から守られます。
5. 「死の使い」がやってきたとき、血が塗られた家は通り過ぎた。⇒同じように、神はご自身の裁きを通り過ぎさせる道を備えられました。このようにして、私たちが受けるべき裁きはすべて、イエスに負わされたのです。
6. 子羊の骨を折ってはならない。⇒神は、過越しの子羊を食べるときに骨を折ってはならないとイスラエル人にはっきりおっしゃいました。これは、子羊がイエスをあらかじめ示す「型」だからです。

ヨハネは詩篇34 : 20を引用し、イエスが最後の過越しの子羊であることを確証づけます。

次に引用されているのは、ゼカリヤ12 : 10です。

ヨハネはこの箇所を引用し、十字架を取り巻くすべての出来事を神があらかじめ示されたことや、十字架の日に起こったことはすべて神によって支配されていたことを決定的にします。

神はご自身の永遠のご計画を成就なさいました。それは、罪の対処です。

最後に、38-42節でヨハネは、イエスの遺体を取り外されて、園にある墓に埋葬されたと語ります。イエスの遺体は亜麻布で巻かれ、ニコデモが用意した没薬とアロエを混ぜ合わせたもの約30キロが施されました。ニコデモは、ヨハネ3章に登場した人物です。彼はイエスの言葉を心に留め、「新しく生まれた」のかもしれませんが。

適用

今日の話から何を学べるでしょうか。

まず、忘れてはいけなは、神の目に罪がとても深刻なものであるということです。罪に耐えることも、罪を見ることが、罪のある場所にいることも神はおできになりません。私たちは罪をそこまで深刻に捉えないことがあります。その考えを改める必要があるかもしれません。

次に、イエスがこの世に來られた具体的な使命は、神のもとに歸る道を与えることです。イエスは、私たちの罪の罰を負って死なれました。身代わりのいけにえとなられたのです。罪のないお方が罪人のために死なれました。イエスに罪はなく、私たちには罪があります。ですから、人は誰でもイエスを必要としています。

最後に、私たちは人生における賢明な選択をするよう気をつけなければなりません。まだクリスチャンでない人は、自分の人生を振り返り、創造主なる神聖な神と自分との関係を考える必要があります。

私たちはこのお方の愛と赦しを経験しているでしょうか。まだでしょうか。このイースター、私の罪を赦してくださいとイエスにお願いしてみようと思いませんか。